

氏名	澁川 ナタリ				
ヨミガナ	シブカワ ナタリ				
学位の種類	博士（音楽）				
学位記番号	博音第308号				
学位授与年月日	平成30年3月26日				
学位論文等題目	〈論文〉 現代ピアノでの舞曲演奏法—宮廷舞踏の実践と共演を通して— リュル=ダングルベール アルミードのパスサカリア 〈演奏〉 J.S. バッハ フランス風序曲より クラント、ガヴォット、パスピエ、 サラバンド、ブレ、ジグ ラヴェル クープランの墓より フォルラーヌ、リゴドン、メヌエット 他				
論文等審査委員					
主査	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	坂井	千春
副査	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	大角	欣矢
副査	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	大塚	直哉
副査	聖徳音楽大学	准教授	（音楽学部）	市瀬	陽子

(論文内容の要旨)

本論の目的は、宮廷舞踏の身体感覚と、そこに内在する西洋的拍感をピアノ奏者の視点で考察し、現代ピアノでの舞曲演奏法を提案することである。宮廷舞踏とは、西洋の王侯貴族が、ヨーロッパ各地の民俗舞踊を取り入れ、作り替えたものである。本論では主に 17 世紀のフランス宮廷舞踏を取り上げ、ピアノ奏者である澁川の実践研究を通して、舞曲の演奏法を模索した。フランス宮廷舞踏では、音楽と舞踏との関連が「舞踏譜」として視覚化されており、演奏研究を行う上で貴重な歴史的資料となっている。音楽と舞踏が不可分の関係にあった時代に倣って、身体という共通項からピアノ演奏法を考察することが本研究の狙いである。

第 1 章では、本論の礎として宮廷舞踏の歴史を概観するとともに、舞踏譜に示される、舞踏と音楽相互の関連を確認した。

第 2 章では、ピエール・ラモ Pierre Rameau (1674~1748) の著作『ダンス教師 (Le Maître à danser)』を基本資料として、専門家の指導のもとに宮廷舞踏の基本姿勢と身体感覚を学び、そこから得られる基本的な拍感とともに、ピアノ演奏時の姿勢と奏法への応用を考察した。

第 3 章では、特定の楽曲を取り上げて演奏研究を行うとともに、その過程を言語化し、考察した。研究の手段は、①宮廷舞踏の実践、②宮廷舞踏との共演、③チェンバロでの演奏研究、④ピアノ演奏への応用の 4 点である。宮廷舞踏の実践においては、第 2 章で得た基本的な身体感覚をもとに各舞曲の基本的なステップを学び、ピアノでの舞曲演奏に求められる拍感と身体感覚を考察した。宮廷舞踏との共演では、舞踏実践によって得られた舞踏感覚をもって宮廷舞踏家との共演を行い、舞曲演奏について、演奏者としての身体性と結びつけた分析を行った。チェンバロでの演奏研究では、宮廷舞踏の拍感や身体感覚を裏付ける奏法及び演奏習慣を考察した。それらの実践研究を踏まえて、ピアノ演奏への応用を考察し、舞曲演奏法を提示した。対象とした楽曲は、1). ジャン=アンリ・ダングルベール Jean - Henri d' Anglebert (1629~1691) 編曲による、ジャン=バティスト・リュリ Jean - Baptist Lully (1632~1687) 《アルミード》より〈パスサカイユ〉、2). ダングルベール『クラヴサン曲集』より〈メヌエット〉、3). フランソワ・クーペラン François Couperin (1668~1733) 『クラヴサン曲集第 2 巻』より〈第 8 組曲〉、4). ヨハン・セバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach (1685~1750) 《フランス風序曲 BWV831》、5). ジョゼフ=モーリス・ラヴェル Joseph - Maurice Ravel (1875~1937) 《クーペランの墓》である。

終章では、第 2 章および第 3 章で考察したピアノでの舞曲演奏法を振り返り、姿勢、拍感、アウフタクト、息づかい、テンポ設定について、共通する要点を整理し、総括とした。

本研究の成果として、4 段階の実践研究から現代ピアノでの舞曲演奏法を考察し、具体的に言語化を行った点が挙げられる。また、チェンバロの舞曲作品が、舞踏を介した演奏研究により、現代ピアノのレパートリーとしても演奏され得る可能性を増すことを示した点も挙げられる。さらに、宮廷舞踏と直接の関連性が薄い J. S. バッハの《フランス風序曲》やラヴェルの《クーペランの墓》についても、舞踏の身体感覚に基づいた研究を行った上で、各曲に応じた演奏法を考察したことは、アナリーゼの手段としての宮廷舞踏の応用性を確認する意味で、一定の成果を得られたといえる。

音楽と舞踏は、それぞれが専門性を高め、独立した発展を示す一方で、人間の根源的な生命感を共有する芸術である。拍と拍の間にある生命感を舞踏から学ぶというアプローチは、演奏研究の方法として、今後ますます一般的になっていくものと思われる。本論では宮廷舞踏に焦点を当てて実践研究を行ったが、他の時代の舞曲演奏法についても、舞踏との関連性を検証しながら長期的な研究を行うことが今後の課題である。

(総合審査結果の要旨)

「現代ピアノでの舞曲演奏法—宮廷舞踏の実践と共演を通して—」というタイトルの本論文は、従来の資料を中心とした学術的論文と違い、ピアノ演奏家の視点から舞踏の身体的感覚を実践で学び、演奏に結び付けることを言語化するという、今までにない画期的な論文であったと言える。

澁川はバロック宮廷舞曲を演奏するために、時代背景や舞踏譜など紙上から学ぶだけでなく、自らも古典舞踏の指導を受け、プロの舞踏家との共演も多く経験した。また、大塚直哉准教授からチェンバロのレッスンも受け、ピアノとは違うタッチや、バロック音楽演奏の基礎も学んだ。

その経験を生かして、バロック舞曲の実際の動きと音を密接に関連付けて考察し、自分のピアノ演奏と照合し、詳細に分析したのが本論文である。多様なステップのバロック舞曲の拍感とフレーズ感を踊り手と共有するために、体軸や重心移動をどのように感じ、鍵盤上の腕や手の動きをどのように行うと良いか、チェンバロ演奏とピアノ演奏の相違点と共通点、などを自らの感覚と言葉で具体的に記述している。名演奏と呼ばれるものは、それらを自然に実施しているのだが、意識的に分析し、自らを改善していく過程を言語化することは貴重であろう。教育的分野においても非常に有益な資料となり得るもの

のである。今後はバロック舞曲に限らず、マズルカ、ポロネーズ、ワルツ、スペイン舞曲など様々な時代の音楽にも発展できる研究である。

演奏審査では、前半に市瀬陽子准教授に踊って頂き、パッサカイユ、フォルラーヌ、リゴドン、メヌエットなど多数のバロック舞曲を演奏した。通常、踊りにくいと言われているJ.S. バッハの作品も振付けて頂き、充分美しく踊れて演奏できることも証明した。市瀬准教授の素晴らしい舞踊によって演奏会を一層盛り上げてくださったことに感謝申し上げたい。博士課程1年目からご指導頂き、渋谷も共演を重ねるごとに自然に踊りに合わせられるように成長したと思う。彼女の研究と努力が結実した見事な演奏だったと言えるだろう。

後半は近代フランス作品からバロック舞曲の名の付くラヴェルとデュカのピアノソロ作品を演奏し、その関連性が興味深かった。

論文は主観に基づいているために細かい改善点が必要であり、演奏もすべて理想的に実践されているとは言い難いが、素直な感性と観察力で、斬新なテーマの研究を地道に追求した成果は高く評価され、合格とした。